

913.5
マ
前編 2

松浦佐用媛石魂録

前編

貳

松浦佐用媛石魂録前編中卷

東都

曲亭馬琴編次

第四

詩歌状味トて處女舌戦を

博多彌四郎素延の思ひもかけず藤の仰と棄て。心の中安うらす。いと宿所は立歸く。秋  
 布に執權の仰と聞えあらし。御身鼠川長城野等に怨と縛びし事はかた敷。彼等今大人氣の  
 く元事を好みく。かゝる條を申し行ふ事。故こそあらめと。咳バ。秋布去ばし尋思しつ。この  
 事定は故かた侍らす。曩は嘉二郎がみづうら来つ。和歌と需たるとた。あまりに無禮な  
 りしうべ。それは宛つけて。箇様くの歌と詠てとらせ侍り。是をや合て。さし申し行ふ所ら  
 ん。此外は。絶て思ひよまる事も侍らすといふ。彌四郎聞て。やうやく曉得。これありく。  
 嘉二郎は元来無學の俗人なれども。兵太の顔才學ありと。おぼし。あうる。彼等交を厚  
 くして。兄弟の思ひとさせ。必らず心をひとつふし言と巧しして。御身と恥めんとする



よこそ。御身よくなれどざくれをえて。此禍と惹出給へりどて頻は眉根とよせよけり。されど秋布は駭ざる氣色ぬく。父上深くお思ひくし給ひり。さうい未だ兵太とやらんとあり侍らねど。嘉二郎と親く交る程のものぬらば。其友と見て。心の底の深た浅きも推てあられ侍るがうし。よゝや己が身。彼人よ及ずとも。女子の事なれば。父の恥あらず彼も己らに負たらんふの。世の胡慮ふ侍りふん機ふ臨み變は應ぐ。紙全く勝得ずとも。全く負べうは思ひ侍らむといふ。彌四郎のふ心もと取れど。斯て已べきふあらざれば。もつばら其準備をいごたる。時ふ弘安三年十一月十五日。北條相模守時宗朝臣。今日建長寺に于て。長城野兵太敦宗と。博多彌四郎が女兒秋布が。才學の程を試み給ひんとて。豫てその用意あり。判者の執權の母公南殿。并に彼寺の開祖。大覺禪師と定られ。客殿の西を女房として。翠簾拭懸こさむ。こゝに南殿の茵が儲。東は男房として。幔幕拭ひきこさむ。こゝに禪師の椅子と置。一山の法師ばら。執權家の有司の男房は着坐せむ。抑巨福山建長寺に。いぬる建長五年十一月廿五日。前執權時頼朝臣これ建立し。大覺禪師は開祖とほ禪師

諱の道隆元是異朝。宋國の人よして。後嵯峨院の寛元四年に米朝せりす。此は建長二十世の法孫ふして。道德世ふ比ふ。齡八十にあまれども。暹として童顔あり。この聖僧禪機の要道は得給ひるのミあらず。博覧ふして詩文よよ。こゝに於ても時宗朝臣強て今日判者ふ宛られたり。うくて南殿の己の比及ふ。博多彌四郎が従弟倍太郎素久以下。影の女房たちと將て。建長寺に入来あり。知客の老僧これと迎へ。客殿の次の間迄。輪と并入さされば。南殿こゝより輪と出で。設の席に着給ひ。倍従の女房も主の後方ふ居並びたり。其時大覺禪師は。二人の従弟を將て。南殿ふ對面し。こゝに於て男房の上坐ふ着給へば。時宗朝臣の名代として。内管領長崎平左衛門尉頼綱。大紋の袖にたあひして。禪師の次ふ坐し。申次の雑色の二行ふこゝに。末坐ふあり。又注進の武士六七騎馬を山門のはとりに立。事の爲体を。主君に告まうさんとして。袴のろは高くどり。今うくと待居たり。さる程に書記の僧磬を鳴らほこと三杵ふ及て。鼠川嘉二郎の。長城野兵太を將て。東のうとより入り。博多彌四郎は。秋布と將て。西のうとより入り。かのく南殿と拜し奉り。又禪師と拜して對坐

せ。雑色二人。料紙硯とて来りて。其ほとりに居る時。長崎平左衛門頼綱。兵太秋布等に  
 對ひて。執權の仰と傳へ。法令五ヶ條を讀あげたり。その略。第一。禮儀と亂るべからず。第  
 二。喧嘩すべからず。第三。最原の輩。助言をべからず。第四。筆戦三四。所謂詩和歌。連歌。是  
 り。まふち執權御母子より題を給はり。其とびくに是と開きて。速小筆と下をもつ。勝  
 とは。是筆試もて其才を戦を。故小筆戦といふ。第五。小舌戦二回。これに互小和漢の故實  
 試問答。その才と戦を。故とて舌戦と稱ふ。條目をべて斯の如しといふ。其景迹。江湖の  
 場に異ならず。頼綱の件の箇條と讀果て後。粉塗紙金ふてだみと。手箱紙開て。詩の題試  
 どり出せ。申次の雑色受どりて。兵太秋布に。こち與れば。兩人等しく押戴て。聞き見  
 る。小門字の謎と記されたり。これ門の字を明白ふい。いむして。謎もて賦を。難題おれば。兵  
 太。怒地迷惑。あゝ。沈吟。やゝ久しと。雖も。終小其趣向と得む。秋布に。深く。紫入。たる。氣色も。あ  
 さら。くと。書つけて。さし。出せ。雑色。どり。次て。頼綱。小。通せば。頼綱。是を。禪師。に。呈。せ。禪師。を  
 此。うち。高。やう。に。吟。給。ふ。其。詩。は。

門字謎

借花間紅日西陞 門朱戸不見多才  
 衙闌干東邊隱々 門無心懶傍粧臺

禪師判て云。花間。惜む。紅日。の。西。小。陞。こと。と。ど。い。門。といふ。を。守。眼。と。は。間。といふ。守  
 の。日。を。陞。と。た。これ。門。の。字。なり。朱。戸。を。聞。て。多。才。と。見。ず。とは。聞。といふ。を。守。眼。と。は。閉。と  
 いふ。守。の。才。と。見。ざ。れば。これ。又。門。の。字。と。お。は。闌。干。小。衙。東。邊。隱。々。とは。闌。干。の。闌。と。守  
 眼。と。を。闌。といふ。守。の。東。か。く。ると。さ。い。これ。も。又。門。と。お。は。門。て。心。を。さ。も。粧。臺。小。傍。小。懶。と  
 は。門。といふ。を。守。眼。と。を。門。といふ。字。に。心。を。た。と。さ。は。これ。も。又。門。の。字。新。の。ご。と。く。四。句  
 の。中。に。門。の。字。四。箇。と。隠。して。義。理。分。明。實。小。妙。作。と。稱。賞。給。へ。ば。お。の。く。深。く。感。て。已  
 す。兵。太。既。に。負。ひ。けれ。ば。嘉。二。郎。頼。小。焦。燥。て。潜。ふ。その。昔。と。歌。て。催促。を。給。ふ。兵。太。の。只。さ。し  
 俛。さ。て。應。せ。ず。秋。布。第。一。番。の。詩。作。し。勝。ぬ。と。聞。え。し。ら。ば。注。進。の。武。士。一。人。馬。小。閃。し。とう。ち  
 騎。て。鞭。を。鳴。ら。し。足。撥。と。え。め。執。權。の。館。を。斥。て。暮。直。し。馳。去。け。り。さて。今。度。の。和。歌。お。れ。ば。南



殿より歌の題と出給ひと致す。一字題二字題ふのありを以て。紀州の郡七ツと。歌の中よ  
よみ入れぐ。とあり。これいぬる夏秋布が。和歌の浦よいさうぬほでも紀の國や。と致たり  
し。秀逸と思ひよして。今此難題と出給ふなるべし。紀州の七郡の。伊都郡那賀郡。名草  
郡。海部郡。在田郡。牟婁郡。是あり。是と三十一字に録入れん事。容易はあらざれば。兵太の  
頼の思案ふ及ばむ。心くるしく見えざるふ。秋布のえや録得たりと。かばしくて。墨摺か  
などするふ。嘉二郎の心。慌頼ふ。咳まて促せども。兵太の遂ふ趣向と得む。秋布頼書とい  
りて。短冊をさしかけ。博多倍太郎坐とちて。是をとり次。南殿ふ違ふを。文臺ふ受  
乘りて。讀あげ給ふ。其歌ふ。

伊都郡那賀夜の名草海を海部り在田へむ日高ん牟婁ふ住バヤ

三十一文字ふ七ツの郡と録入れ。歌の心明なれば。南殿の云も更ぬ。人みあ香と吐て  
感吟。注進の武士ふ斯と告て。伴の詠草を速與せしう。一人馬ふうち乗て。飛が如くに走  
らしぬ。さる程ふ長城野兵太の。歌合ふも負され。心いよ。燃るが如く。嘉二郎の最本

意なきに。恨あげに長城野とうち見やりて。あはく。嘆息あさりけ。うくて。第三番ふ及び  
て。筆戦は是限りぬ。今度の連歌ふてありしう。長崎頼綱席と進めて。

目がれせぬ夜と誰がわたの月

といひうけたり。時ふ秋布頼ふ應て

花ふくも花日もあるものとえ花といへ

とつけと。亦これ當意即妙ふ。目がれせぬ夜の飽もせぬと。誰がわたの月といひせめ  
花。と云とうけて。花がもりを花日もあるふ。え花と云が如しとつけて。春ふ晴るまとうけて  
いへり。申次の雑色。この連歌と書つけて。騎馬の武士ふ通與しければ。第三番の注進。馬ふ  
拍いれ。宙と飛りて馳行。こまにいさつて。長城野兵太の。三度の筆戦ふ負しう。頼綱歌  
苦々まき氣色ふ。嘉二郎兵太と見うへり。おの。斯事と好きて。よしな花條と聞えあ  
げ。いひがひえなく。三五の未通女に詠伏せられ。巧拙も且く聞て。一首半句も連ぬるに及ば  
む。以の外なる越度ふこそ。と取まむれば。兵太潜に冷笑て。文人才子に連吟あり。又早吟あ

り。左思が三都の賦。十年の苦心と積て。初めて成就。彌衡が鸚鵡の賦。草稿と更をて。即座に章とあせり。然れども何きと勝り。何れと劣るとせむ。某元来王業が宿構の識と取る故。卒爾に筆と下さむ。こゝともて遅吟なり。えい古戦して一問答せば。絶て口と開うせ候。いと云に。嘉二郎をよほ陪ミぬがら。さりともと思ひうへして。やゝ顔色とよほしけり。頼綱聞て。さらば問答あるべしとて。舊の席に歸り着。執筆二人左右ふりうれて此問答を記さんと用意する。嘉二郎の心の中にあらふる。神と祈念あつ。兵太。一世の濟沈こくにありと思ひうら。氣と勵して。秋布。對ひ。唐山の經書史傳。最むづうけき。女子の預うらぬ事なればとて。知ずともいひ脱き給ひぬ。より。最淺た所と問べ。今日内管領ともて。執權の名代と給ふと聞ゆ。此名代と云事は。古語。俗語。何れの時。いひ出せる。答給へと詰問。秋布。微笑て。こゝ今の俗語。非ず。いとゆるくより。云事と見えて。古事記。仁徳天皇の紀。大后石之日賣命の御名代として。葛城部と定む。太子伊耶本和氣命の御名代として。壬生部を定む。水齒列命の御名代として。蝦部を定む。大日下

王の御名代として。大日下部と定む。若日下王の御名代として。若日下部を定むと侍り。うくれ。名代といふ事。仁徳天皇の御時より已前に。云えて来れる。なりと答れば。兵太。忽地。閉口。蔑がさくと思ひたる。秋布。重ねて。こゝにも又似つう。いゝ。淺た處と問。答をべし。彼首の屏風に。小鳥影を畫きたり。然る。鳥ふめの字とをえ。稱するもの。い。ま。め。は。む。く。ら。め。ひ。が。ら。め。山。が。ら。め。四。十。う。ら。め。か。ん。ど。な。り。す。ま。め。と。つ。む。め。は。今。も。め。の。字。と。を。え。呼。び。侍。れ。ど。ひ。が。ら。め。山。が。ら。め。め。と。省。た。く。稱。侍。り。此。め。の。字。は。義。理。を。い。う。事。事。に。侍。る。と。問。は。兵。太。も。眼。と。睜。し。口。を。開。た。答。ん。と。す。る。云。所。を。知。ず。數。回。咬。り。て。漸。く。に。云。や。う。物。は。名。づ。く。る。事。悉。く。故。ある。に。あ。ら。ず。是。等。の。あ。は。り。に。淺。た。事。取。れ。ば。未。だ。考。さ。り。い。へ。ば。秋。布。う。ち。咄。く。古。へ。の。人。必。ず。物。に。名。づ。く。る。事。故。あり。名。正。し。う。ら。ざ。れ。ば。事。行。き。む。と。云。な。る。さ。て。い。す。ま。め。つ。ば。く。ら。め。の。義。理。と。あ。ら。で。ま。と。い。を。る。と。い。い。せ。も。あ。へ。む。兵。太。大。に。赤。さ。ち。て。己。れ。實。に。淺。え。う。な。る。事。は。心。と。用。ひ。む。其。故。あ。ら。ば。解。給。へ。い。で。聞。く。べ。い。とい。は。は。け。ば。秋。布。が。云。や。う。す。ま。め。は。む。く。ら。め。ひ。が。ら。め。ぬ。ん。ど。は。群。々。飛。小。鳥。な。る。と。も。て。

め。の字とそえて呼び侍り。むれの約めとなる故あり。さればすゞめ。すこも鳴て群る鳥な  
れ。すゞめと名づく。つむくらめは。土と食ひて。是も群る鳥なれば。つむくらめと稱ふ。つ  
むくらめ。つちくらふの略稱へ。それをおほ略して。つむめども稱侍り。ひがらめ。山がら  
め。推て知とまへうしと云ふ。兵太をおほ負ド魂を還して。小勝と進めうにそれよても  
あるべし。然らばうぐひま。ほと。ごま。ま。ま。うらをなんどは。まの字とそえて呼べり。又  
虫よさりぐすあり。是等も深丸故あり。と問ふ。秋布答て。伴の鳥どもは。果とくふ事の  
眞實やうなれば。すの字とそえて呼び侍り。うぐひま。愛食業まで。うれいしく業と食ふの  
謂なり。又不とごまをまのまの。子よ。稱美の謂へ。彼が鳴聲の。ほとく。と聞ゆれば。ほ  
と。ごまといふ。是ほとく。な丸まのおと略せり。うらまをうらくと鳴ともて名づけ。ま  
まをけんくと鳴をもて名づく。うま。くけこと通て。ま。と云もけと云え。其意に同。又ま  
りぐまの。草葉にまどく虫なれば。まの字をえて呼敷。聚とまどくと訓。まゆを約ま。ま  
まとあればなりと云。其論水の流るゝが如く。露むらりも委あければ。兵太に玉あま汗と流

一。最朽をくは思へども其才敵一がさければ。走よさへ負てげり。斯て執筆二人此間奉て  
書留め。騎馬の武士。時宗朝臣。注進。吉戦。二回。こゝに事果たりけし。博多彌四  
郎。漸くに安堵て。最歎一げ。見えたる状。嘉二郎。宛く思ひて。頼のあさり。状ぬくように  
えつ。ひとり憤るといへども。絶く其かひあし。かくて南殿に。秋布を近く召て。今日の事。思  
ひしより。教群取。せよ。比なき才女。うま。相州も聞給。さ。さ。こ。感。おほ。ま。べ。し。と。て。只  
願褒賞。給へ。禪師。頼綱。倍太郎。以下の輩も。又これを聚て。己を。只。鼠川。と。長。城。野。の。ま。い  
よ。胡。應。と。ぞ。な。り。に。け。る。さ。る。程。南。殿。に。大。覺。禪。師。別。と。告。秋。布。を。將。歸。り。給。へ。博。多  
倍。太。郎。同。彌。四。郎。以下。移。の。女。房。先。方。後。方。に。附。ま。と。が。ひ。て。輪。乗。一。參。ら。せ。平。左。衛。門。尉  
頼。綱。に。少。引。下。り。て。兵。太。嘉。二。郎。等。と。伴。ひ。つ。執。權。の。館。へ。ぞ。參。り。ける。

第五 才を相て讒奸罪せらる

此日時宗朝臣は。近臣等が注進よつ。秋布兵太が勝敗と。よくしりて。ねにせしが。中下  
刻。及て。南殿に。秋布等を將て。建長寺より歸りたまひ。直に時宗朝臣に對面あつ。其日



の爲体と。おちもぬく物がとり給へば。相州大は感悦あつて。頃日の鬱胸と。やく閉きぬと  
 宣ひたり。浩庵は長崎平左衛門尉頼綱の。鼠川嘉二郎。長城野兵太が俱して歸り来つ。ま  
 ぬうち秋布が詠草と呈上を。其時時宗朝臣の。嘉二郎兵太とあはれは。此悪物何の  
 面目あつて。再びこれを見ゆるが。云事あらばいへ聞ん。といたまは高く責給へば。件の二人  
 の背は冷汗と流し。席薦は頭と擲著て。一言半句も回答とせむ。時宗まを。怒て頼綱と  
 見りへり。嘉二郎兵太の。豫てよろらぬ行ひありと聞えし。格外の憐愍もて。是非の  
 制度は反ざりし。這奴等おほ己をあらむ。才と獨で上と蔑を。其罪最重うらむ。今の許が  
 とい。とく。追拂ひ候へど。仰もあへぬ。頼綱はとよりて。嘉二郎が頭髻をうい廻し。扇と  
 もつて。丁々と打走えつ。聲をぬり立ていへりける。汝が年米の悪行。これ屢々教訓状  
 加ざりし。露ばかりも用ひざれば。己ことを得む。内々義絶を。雖も。恐は奴姪の因に脱  
 す。其の面目と喪へり。え。聊も恥とあり。其首と繼し給ふ。君恩の鴛なると思ひあらば。水  
 よも沈み。火よも焼きて。人を見らるゝとぬうれ。と罵り。矢庭は兩刀ともぎとつて。搦より撲

地と突落せば。博多彌四郎。又執権の仰を承て。長城野兵太が大小の刀を振とり。是とも度  
 へ突落しぬ。是なるうぬ。槍山の火の。槍より出て。遂は槍と焼といふ。今この兩人が奸計も  
 又然り。是と慎よ。是と慎よ。汝より出さるもの。汝は返るものなりと。曾子のいへるが宜  
 かりける。さる程は奴隸等の。筈をとつて。嘉二郎兵太は催促し。日米帽一と思へば。鴈春  
 の嫌ひなく。或は打。或は罵。只顧ふ追たて。庭門より走ら。たり。うくて。時宗朝臣の。秋  
 布に砂金十兩を給ひり。南殿より小袖一襲と賜り。又建長寺へ。博多倍太郎と使者と  
 て。大覚禪師へ。影の謝物。は贈りたまふ。秋布は。是日の首尾。残る所もかく。剩。過分の  
 恩賞を賜りければ。父の彌四郎と共に。執権御母子に謝し。申し。聽て。御前と退出ける。う。り  
 いう。南殿のまを。秋布は愛かほ。つ。次の年の春のころより。父の彌四郎と見給ふ。毎  
 に豫ていひつる。婚縁のいう。よ。ど。願川吉次と婿ふ。とりて。あへて。不足。ふもあら。や。など  
 宣ふ。彌四郎長て。女兒も。や。十六歳。ふ。あり候へば。速う。らす。媒。あ。つ。て。吉次。ふ。い  
 のせ候べ。と。應奉り。が。公務。暇。なくて。う。の。年。も。半。い。と。づ。ら。に。過。つ。漸。く。秋。の。季。ふ

鎌倉 嘉三郎  
徳倉 大  
徳



わたし

徳倉大郎

長谷川

徳倉大郎



北條時宗

長谷川

徳倉大郎

至り。親族ふればと。博多倍太郎と謀めふとのみて。瀬川采女吉次に婚嫁の事といはるる。事故なく整へらば。まぬち黄道吉日代擇み。秋布衣瀬川が宿所へ送て遣へ。婚嫁とどり締ぬ。元彼秋布衣。心ざほの風流さるのさぬらす。夫も齊肩て操符貞しく。奴隷は憐れ親族も睦きて。よく内とおさめければ。吉次深く歎び。僧老の契最深く。活處も。九月中旬小至りて。京都の守護。北條治部大輔義宗。(泰時の孫重時の二男)同左近大夫時國(時房の孫。義政の嫡男。この兩大將。京都六波羅ありゆゑに。兩六波羅と稱ふ。執權時宗の親族)よ。鎌倉へ飛札到来。其故を尋れば。太宰府の守護。平經高の裏に謀叛の聞えあつて滅せり。北條時輔(時宗の兄。文永九年謀反よつて。京都にて誅せらる)も。寛あるものなまらう。時輔退治の時。軍功ありよつて。やう心驕り。九ヶ國の成敗放ち。國司の所領と押奪ひ。牛淵九郎清繩と云ものを軍師として。俄頃謀叛を起せらう。白杵河野が徒。是ふ與へ。京鎌倉と攻めて。經高武家の執權たらんと計較め。これよつて。松浦景隆。大友藏人。菊池原田など。經高と合戦し。一時は雌雄と決せんともる處。牛淵九郎清繩の軍船と造らし。肥前國平戸嶋に押渡して。牛角の勢と張り。其機變極り。かしと聞ゆ。いそぎ討手とさし向給ひ。ゆゑに。した大事なるべしと書たりける。時宗一覽あつて。俄頃一族の大小名。内管領頼綱以下の頭人評定衆と召集。兩六波羅の連署と披露して宣ひける。往時輔謀反の時。西國の逆徒忽地亡し。經高一人の功あり。時宗が洛の敵を討つに。よれり。あつるを經高武勇を誇り。京鎌倉を亡せ。浮雲の害貴と極んといさまとも。天争り許せば。天慶の純友の威と九州に振ふと雖も。身死して葬る。地あり。況てや經高を。今一員の大將をさし向ふ。一舉を滅ぶべしと宣へ。みま緒とも。仰理も覺候とぞ應ける。其時時宗朝臣も坐中と倍と見廻りて。秋田城二平實政と近く招た。今日より足下ともて。鎮西の守護とすべし。いろど肥前國へ發向して。はづ牛淵と討とほへ。牛淵に亡る。經高の旭に向ふ霜の如けん。とくく出陣あるべしといをがして。馳て上總介に任ぜらる。實政是と承。諸國の軍勢を催促せば。事遅々に及ぶべかり。只費政が手勢とすつ。今夜由比が濱より船と出候ゆ。願くは文學武略も長とるものを。

至り。親族ふればと。博多倍太郎と謀めふとのみて。瀬川采女吉次に婚嫁の事といはるる。事故なく整へらば。まぬち黄道吉日代擇み。秋布衣瀬川が宿所へ送て遣へ。婚嫁とどり締ぬ。元彼秋布衣。心ざほの風流さるのさぬらす。夫も齊肩て操符貞しく。奴隷は憐れ親族も睦きて。よく内とおさめければ。吉次深く歎び。僧老の契最深く。活處も。九月中旬小至りて。京都の守護。北條治部大輔義宗。(泰時の孫重時の二男)同左近大夫時國(時房の孫。義政の嫡男。この兩大將。京都六波羅ありゆゑに。兩六波羅と稱ふ。執權時宗の親族)よ。鎌倉へ飛札到来。其故を尋れば。太宰府の守護。平經高の裏に謀叛の聞えあつて滅せり。北條時輔(時宗の兄。文永九年謀反よつて。京都にて誅せらる)も。寛あるものなまらう。時輔退治の時。軍功ありよつて。やう心驕り。九ヶ國の成敗放ち。國司の所領と押奪ひ。牛淵九郎清繩と云ものを軍師として。俄頃謀叛を起せらう。白杵河野が徒。是ふ與へ。京鎌倉と攻めて。經高武家の執權たらんと計較め。これよつて。松浦景隆。大友藏人。菊池原田など。經高と合戦し。一時は雌雄と決せんともる處。牛淵九郎清繩の軍船と造らし。肥前國平戸嶋に押渡して。牛角の勢と張り。其機變極り。かしと聞ゆ。いそぎ討手とさし向給ひ。ゆゑに。した大事なるべしと書たりける。時宗一覽あつて。俄頃一族の大小名。内管領頼綱以下の頭人評定衆と召集。兩六波羅の連署と披露して宣ひける。往時輔謀反の時。西國の逆徒忽地亡し。經高一人の功あり。時宗が洛の敵を討つに。よれり。あつるを經高武勇を誇り。京鎌倉を亡せ。浮雲の害貴と極んといさまとも。天争り許せば。天慶の純友の威と九州に振ふと雖も。身死して葬る。地あり。況てや經高を。今一員の大將をさし向ふ。一舉を滅ぶべしと宣へ。みま緒とも。仰理も覺候とぞ應ける。其時時宗朝臣も坐中と倍と見廻りて。秋田城二平實政と近く招た。今日より足下ともて。鎮西の守護とすべし。いろど肥前國へ發向して。はづ牛淵と討とほへ。牛淵に亡る。經高の旭に向ふ霜の如けん。とくく出陣あるべしといをがして。馳て上總介に任ぜらる。實政是と承。諸國の軍勢を催促せば。事遅々に及ぶべかり。只費政が手勢とすつ。今夜由比が濱より船と出候ゆ。願くは文學武略も長とるものを。

一人属られて實政が輔とあさまめ給へういと申はふる。時宗あはし尋思ま。近臣瀬川采女吉次の年おは弱けまど。忠義拔群ふして。智勇双なきものあれば。此男を將てゆたさまへ。吉次よの目今こあさよりいひ知し候べし。と宣へば。實政斜なを飲んで領掌し。忙しく宿所に立歸りて。老黨草野三郎等に縁由を説知し。今夜月の出る比及び。繩と解べしとて。とるものもとりあへむ。西國出陣の用意あつ。手勢都合二百餘騎。由比が濱より着到と記さし。八九艘の大船より乗て。其日の暮るを待たりける。この實政は。時宗朝臣の曾祖なりし。北條泰時の弟。龜谷實泰の嫡男。稱名寺實時の二男に。執權の氏族多る中に。己た親した人なれば。時宗これと擇出して。鎮西の守護とし。まねち上總介に任じて。高連討の大將とあし給へり。げは時宗の目鑑を違はむ。實政只半日が間。軍装して鎌倉と船出せる事。人の及がた所ありとて。親も疎れも。莫賞ざるにあらしとぞ。此日瀬川采女吉次は。出仕せざるをもて。彼件の事を知ず。秋布と娶てより。や、七日に及び。稀なる休暇なりければ。あはし心ゆるやかに覺へ。其日の夕ぐれに。夫婦端ちかう出く。咲わくれ

たる庭の白菊と詠め候。暮ゆく秋を惜む折しも。秋布が父博多彌四郎馬と門内より來捨て。瀬川が若黨村澤俊平に案内さし。連忙まゝ入來ると。主人の夫婦見かへりて。こい思ひがけすどろ。やと坐と立て迎れば。彌四郎上坐に押あがりて。吉次は對ひ執權猛の仰あり。謹んで聞れよ。太宰の經高謀及の聞えあるによつて。上總介實政ぬし。討手の大將を承て。今夜鎮西へ船と出さる。然るに實政頻に軍師を乞申はよつて。便吉次もて軍監とし。實政の輔とし給はんとあり。いそぎ乗船の用意いささるべし。申傳る吉斯の如くと述べければ。吉次是を承て。近臣外様多る中に。弱輩の某かゝる仰と承ること。あよおれ身の面目。之時を移さむ。用意致をべし。と回答する。秋布忽ちうちあてれ。又思ひかへりけん。えからざる仰と稟給ひて。最歡しくこそと云。彌四郎は秋布が。心の中と推量して。解と低し。吉次猛に西國へ赴くとも。これ斯であるなれば。心の及ばん程に。扶持をべし。吉次も後安く思ひ給へ。あういあれ。己が女兒婚姻をふして。僅七日。忽ち別離し。及ぶ事。親の悪業であるべし。懶くおもふを理をあれど。又會難を別あらねば。只心と放して。待給へといひ

弥四郎  
瀬川が家  
使して  
時宗の命を  
傳ふ



若たうあゆん平

瀬川が家

あは

博多浜四郎



慰るに。秋布の胸ふさがりて。果敢くぐく得應ず。吉次是と聞て。彌四郎にいへりたる  
 の。某が寶母玉嶋弟浦二郎といふもの。松浦ありとは聞かど。三才の時より。骨肉の義絶されば生死の程も定りぬらず。今度彼地より起れて。經高と征伐せば。事の命を以て。母と弟が在處とも尋べう思ひ候へば。あらぬ國へ行如くよの非ず。已たて心より勇あり。又村澤俊平の。心ざは信やうあるものなれば。留めおたて秋布が。身の護ともいさまべ。其餘の事。よろづ泰山の庇と蒙べいと云に。彌四郎點頭て。女兒が事。いれるとほでも。一足下の元来忠孝の人なり。然れば神佛の擁護よつて。比類なれ功名。寶母舎弟も環會給ふべ。云べた事の種々なれど。私に米れるあらねば。猶豫を難し。えや退るなり。といひ果て席を立べ。夫婦是と送く。再び舊の坐敷よかへり。吉次聽て。若黨俊平と呼びて。留守の事を聞えおくに。彼肯すして云やう。僕効きより。先君の庇と蒙れば。恩の爲は死べし。と年来思ひて候に。危窮存亡の時に當て。斯宣ふいと本意ありと云。吉次重ねて。汝が云所も。自己の志と舒るのみ。主の爲はせんに行と留と擇ことか。汝と留おうざれば。

己が心安からず。主は物と思ひをるが忠あらんや。枉て思ひ留り候へとて。理を盡して。いひ諭せば。俊平の力及びて。漸くに承引ぬ。吉次又妻を對。火急の仰と承れば。心いそがしく。細あうに聞えおらず。思ひ決せざることあらば。俊平に相語て。兼々此判斷は。一賜へ。と云に。秋布を涙さしやみて。己の事。露ばうりも思ひやらせ賜ふを。申すまで。よの侍らねど。一日く。お肌寒し。逃げた船路の害。針を枕し給ふとも。みづから愛して身を保ち。逆臣を滅ぶ。母御弟君も。環會凱陣を給はん事をのみ。ねがはしく侍り。とて。名残と。いもいへば。いぬいぬさすが。武夫の妻と。見えて。哀れあり。

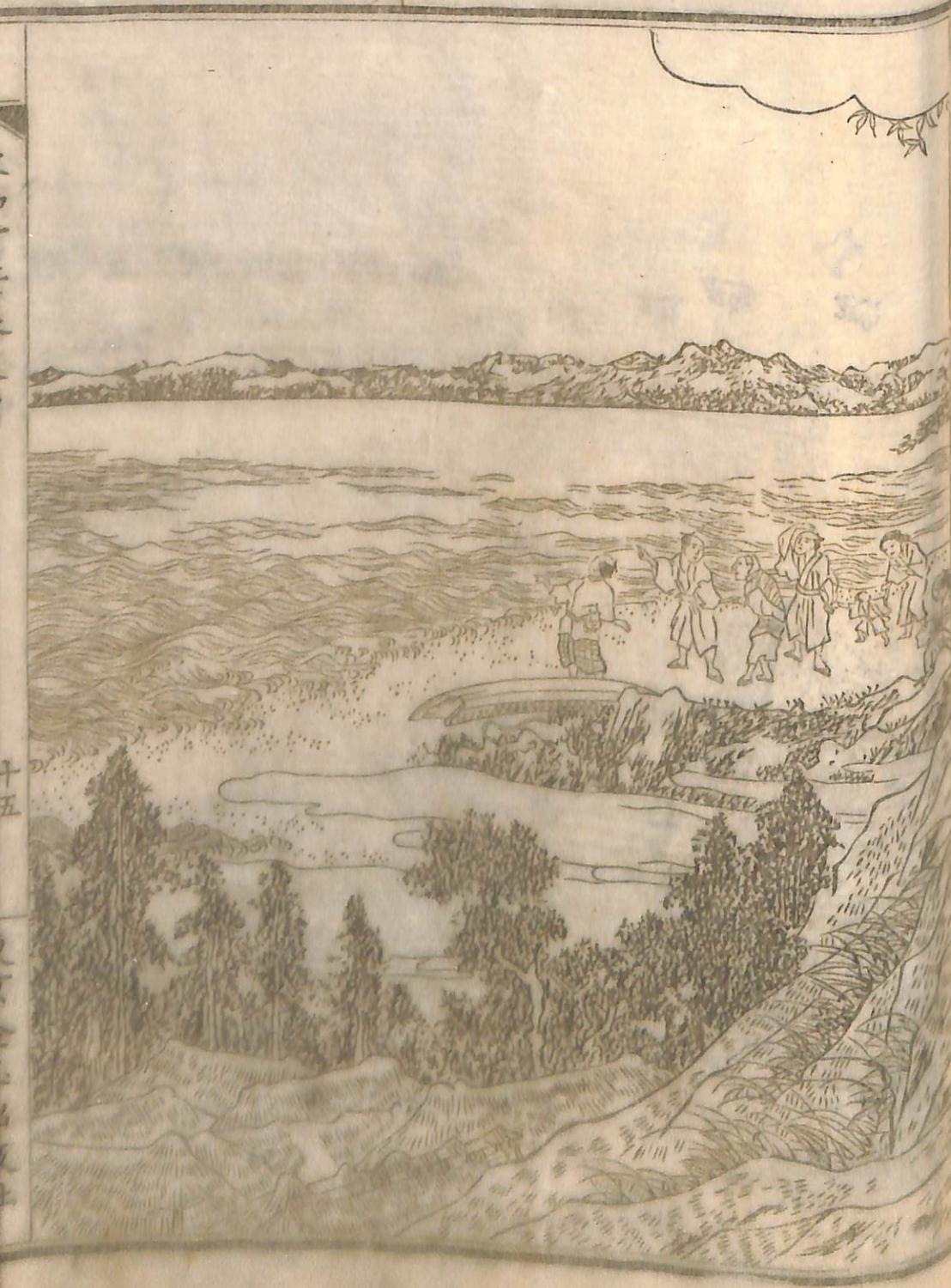
第六

涙を捨て。節婦義男を送る

かきりける處。雜兵一人。喘々走り来つ。門内より。呼まざる。應州(寶政といふ)も。今夜月と共に。船を出して。西國へ。起た給はんとして。目今由比が濱。軍兵と集合給へり。頼川氏いと遅し。とく参り給へ。といひも。果を舊の道へ。走歸れば。吉次。遠く是を聞て。さて。寶政今夜。鎌倉と出給ふなり。や。後まじとして。衝と立あがり。日米床。飾さる。父が。記念の。黒皮威。

鐘を取て投かくれば。秋布のうひくま。拿手挽けた星兜と。雄手の脇よりさし出ま吉次  
 兜の緒を締めま。まゝ秋布がさし出ま。太刀さへ長た旅路やとて。思ひを見あまを妹と春の  
 別れの鐘の。曉あつて。入相の聲さやうなり。其際俊平が月毛の馬ふ鞍おたて。搦づら近  
 く牽出ま。程もあらせむ吉次が閃里と乗て手綱揺操。秋布無事ふ。とゆふやれま。入日と共  
 西の海に出船にあわんと馳去れば。主に後まし馬飼執持。腹巻に小手懸當し。跡は跟てう追  
 たりける。秋布の今さららに。云べたこといひ果す。聞くべき事も聞ざれば。いと名残のと  
 しまれて。涙玉なまのみちりーが。思ひうひて俊平にいふやう。龜谷の石切山は。由比が濱  
 と眼下に見る。直は彼處に赴た。夫の船出給ふを。外あがら見まほし。た。伴ひてよと  
 いろがせば。俊平聞て。げまかろざる別をま給へ。いと遺憾なまばまべた。折しも月  
 の甲夜より明し。いざ給へと應しう。秋布やうやく涙をおさめ。女の童一人と將て俊平  
 は。郷尋させ。石切山へ走りゆく既。は彼山の嶺。まもなりまたり。盛り久し。たむら菊の花乃香  
 いと濃やうなれど。主従露と拂ひもあへず。由比が濱方と見まさせ。清風く風も九月の

十三夜の月さやう。金波長く流まて。玉兔の走る事速く。清波近くうち寄せて。鷗の  
 の飛ぶこと稀なり。されば實政の軍船。只今磯と解ぬと見えて。三脚の旗濱風。飄さしう  
 矢打物と飾立たる。大船八九艘。棹の歌を唄ひけれ。遠し岸と離るれば。これを見んとて老  
 弱男女。彼此の磯。集合たり。石切山より。秋布が。見まさせ。方眼もえ。己が夫の彼船。う  
 この船うとて。指せど。それうとはあるよ。もぬく。えし。乗後ま給へすや。嗚呼。心もとあしど  
 て。主従眉根と擗る折しも。戒許橋の東なる。延命寺の森の蔭より。鐘なる武者一騎。忽然と  
 走り出濱方へ。馬を馳せる。形容。拍物に色。鐘の威毛。かんとこそ。定うに。見えまうね。天晴  
 雄々。た武者態。い。ほがふ。くもあ。ぬその人。あり。秋布の。これと見て。さて。後れ給ひま  
 だ。この。い。う。ま。せ。ま。と。て。主。従。手。汗。揮。り。け。る。とも。あ。ら。ず。し。吉。次。は。主。君。小。解。列。を。申  
 さんとて。執權の館へ参りて。時宗朝臣に拜謁し。直に退出。馬と走り。つ。由比が濱。ま。采  
 て見れば。思ひの外。事。後。れ。る。船。の。既。は。岸。と。離。れ。大。洋。遙。に。船。ゆ。く。ま。吉。次。吐。息。と。こ。と。ゆ  
 焦燥。この。朽。と。ゆ。ふ。沙。水。馬。と。ぎ。ぶ。と。乗。入。れ。て。追。着。ん。ど。ど。込。せ。る。秋。布。主。従。は。この



石切山小  
秋布  
良人を  
目送る





形勢はほま〜詰み。いうに勇くおのまるとも。暴虎馮河の悔あるべし。浪風あらは海上  
 と。いつまでう進給ふ。押流されやま給はん。今も沈み給ふうとて。これともあらでも落ども  
 に聲と限りよ呼び留れど。間遣は速けきバ。どまぬもげぬ理をぬり。かゝる時よの神佛の  
 冥助を仰ふまゝくことかしと。主従こゝををひとつよして春日八幡住吉四社鏡の神社も  
 なれ。誠と照らし給へとて。まむし丹精を凝し流る。又海づらを眺望れば。神々守らせたまひ  
 けん。吉次も。逆巻浪を物ともせむ。騎人の遠者。馬の逆物ん。人と馬と力と戮して。船近く乗  
 つけたり。寶政の。船よりこの形勢と見て。大に詰み。あれ吉次と助よとて。船とらへさせん  
 と下知まるふ。軍兵。夥うち乗る大船を。速ふ船かへまべくもあらねバ。終は思ふはほり  
 一得す。看々可惜壯夫を殺せことよと。啖死するふ。吉次半丁て乗着しかバ。ぬうく欲び。馳  
 て人馬とも。船は扶のぼさし。信やうに動れば。吉次の。執權へ。身の眼を申せし間ふ。思ひ  
 の外後きたるよと述べ。寶政聞て。まかすバ其許の懈まるよにあらず。目今の爲体と見  
 るよ。盛綱が藤戸を渡せしに勝れり。船出のこの黄昏過よと定するよ。潮と風との便宜あれ

バ。久あく待あはせることと得ざりし。こゝともて心の外に。大は其許を勞せしとて。他事ぬ  
 たさはふ聞えけり。されバ浦曲なりける見物の良賤も。吉次が大洋と渡せし。稱どよめた  
 ておのが家路よ立ちへまむ。吉次が從卒等。海を渡まによしおたれば。陸地より西國へ赴  
 た。秋布主従。石切山より吉次が船は乗得ると見て。やうやくよ心おちあされど。船は  
 跡なくぬりゆくよ。秋布いとまこ、海ほそくて。村澤俊平よいへりける。ものよのかぬ  
 らす因縁あり。己が身この石切山ある望夫石のほとりにて生れ。良人の又松浦ぬる鏡の  
 神社の祈子ぬりとす。されバよ。今宵の景迹も。唐山の望夫石。吾國の領中磨山の佛。似  
 て。己が悲みの。いよしへの松浦佐用坂も勝るべし。會者定離とい云ががら會ことか  
 く列るよ。易たの濟世なりけりとして。辨と惜ますよと泣バ。俊平これと慰めてきほく  
 云こしらへ。やがて麓へ下りける。

第七

海濱よ書と失ひ書と得たり

秋布の夫吉次が西國へ赴たてより。既五六十日と經されども。絶て一度も音耗なく冬も

えや半を過て。長た終夜いも寝られぬ。ほどほまぬ。曉よ。入る月を詠めて。鎮西の方より  
うーく。ほくく。と孤燈は對ひては。吾影おろて友もぬく。只管は思ひ得そりしかば。父の彌  
四郎これと見て最こゝほもとなくおぼえ。毎日若黨關兼七と違ひして。その安否と問せ  
けり。この兼七も。秋布が幼た時より守得たさるものなれば。僕平よりは。心くほあく思ふ  
から。秋布の彼が来る毎は。夫の事のさひひ出く。不覺お落涙おさりければ。兼七の其心中と  
推量。かくまではおもひくし給ひて。不慮の事あらば。いうよせん。僕平は。父上は聞えあ  
げ。近たは西國へ行くべし。消息なんどい。豫て寫めおた賜へうしと。信だちて聞ゆるよぞ秋  
布料おらす歡びて。それと彼地は赴たて。面あさり己が夫の安否は問ぬ。これにまを心や  
りいあら。父の氣色よろし折と窺ひ。申しこしらへてたべといふ。兼七はこゝろ得果  
て立かへり。其夕主君彌四郎は。件の事お告おけま。彌四郎もさすがに恩愛のゆるかさを  
く。余りよ女兒が思ひ細りて。長た病着よ臥もやするとして。心安からざる折なれば。今兼七が  
西國へ行んといふと聞て。竊に歡び。私に戰場へ消息をいさを事。我ありては許がさし。も

一汝が心ひとつよて行んとぬら。我はあらずがほよてあるべし。と回答しかば。兼七畏て  
その夜又瀬川が宿所は赴た。秋布は彌四郎が云しことと聞えあらし。かゝれば盟を勉めて  
旅立候べし。書簡おど寫めをた給ひ。目今通與給へと云し。秋布大に歡びて。豫て便あらし  
送らんとて。毎夜は手づから織たりし。錦一卷と十尋も餘るべく見ゆる。書簡一封をとり  
出し。又口づから云べた事を。丁寧よ云あらし。又一封の金と。一裹の丸薬をとり出して。こ  
れとば兼七に錢列し。それと今ゆたて。いつの程より歸り来べたかと問は。兼七はし僕へ  
今茲もおほ四五十日のあれど。路遠なれば。年の内よも覺つらなし。正月の上旬ふら。必ず  
歸り候べしと。回答えて。書簡と錦を受とり。金と藥と給ひりて。馳て宿所へ走りかへり。  
俄頃は行装を整つ。八聲の鶏ともゆとも。西とさして立出ぬ。こゝよ又瀬川嘉二郎武  
行。長城野兵太。敦宗は。去年の冬。鎌倉と追放れ。些の貯積と命綱として。伊豆の山中に躲  
き住ミ。嘉二郎が奴隷勤八と。とりく。潜やうに鎌倉へ遣して。事の爲体を窺せ。瀬川采女  
が秋布を娶りし事。又今度實政は従ひて。彼人西國へ赴たさるよしを傳へ聞て。嘉二郎は

よく獨ひとく思おもひしうべ。いふいもして瀬川博多せがはのかた ひらうけの兩家りゅうけを寇かすして。この怨うらみと復たがひさんとて。頼たの兵へい太たと談合だんがうをとりける。ある日あるひ勘八かんぱち慌あわしく走り歸かへりて。秋布あきふが日ひ求もと夫との事ことと。心こゝろもとなく思おもふのあまり。潜ひそか博多はくたに家いえ隸れい。關せき兼七かねしちを使つかして。肥前國ひぜんくにへ遣つかをよつと兼七かねしちに昨きのうの曉あけ方かたに。鎌倉かまくらと發足はつそくせしよし。陸りくに聞きて候つと告つると。兵太へいをけくぐと聞きて嘉二かじ郎らうを見みるへりも。一ひと其途中そのちゆうちゆうにて。兼七かねしちとうち殺ころす。秋布あきふが書簡あきふと奪あひとり。瀬川博多せがはのかたを自滅じめつさせん謀ま。これとて行いふべし。あられども彼かの兼七かねしちに。武藝ぶげいも達たし。人ひとに勝かれざる健足けんそくありと聞きく。勘八かんぱちともて追おむるとも。爲な謀ません事ことおぼつちあし。と云いも終おらざる。勘八かんぱち大おほく焦燥しやうさうく。いふおれ。バ他の家ほかのいえ隸れいのこぞ稱ほて。勘八かんぱちとばかり見侮みおし給たまふ。兼七かねしち勇ゆうしと云いとも。三面さんめん六臂りくべいにあらず。路みちをゆくは速はやくとも。一ひと異い四足しそくにあらず。僕わがかおらず爲な謀まをべし。えし計はかりあり。示しめし給たまへといき偏ひとくよ。兵太へい微笑へいして。いふしへとも。兵へいに乾道けんどうありといへり。俗ぞくに所謂しよゐ証しやうを。手ておし。叙じゆあしく。何なに地ちまでも跟つゆきて。彼かのはあしる事ことなれと説せしをに。嘉二かじ郎らうこの問答もんたうと聞きく大おほく歡よろこび。やがて勘八かんぱちの些ちの路費ろひととり。事こと成就じゆうじゆせば賞銀しょうぎんに比ひ十倍じゆじゆと云いべ

一といふ。其時そのとき勘八かんぱちの件けんの銀ぎんを拵ひり見て。僕わが今いま此この大事だいじを承うるに。かばかり此この路費ろひと給たまはりては。餘あまりに本意ほんいあり。事こと成就じゆうじゆせば。如此このごとくに賞銀しょうぎんを與たまふといふ。手形てがたありとも給たまはらむ。やと喧なげ。嘉二かじ郎らう聞きて冷笑れいせうひ。我われかく流浪りゅうらうの身みと取とれ。汝なんぢが陪ともむも理ことあり。さらば手形てがたととらせんとて。硯えん引ひよし。さらく書か寫かめて與たまふれば。勘八かんぱちこれ受うけとりて。只ただ一足ひとあしもえやく。兼七かねしちに追お着きんとて。学まなび折ひ折ひ笠かさとふりく。麓ふもとのうへ走り去さりぬ。元來もとよりこの主役しやくに。怨うらみの一字ひとは他ほかとも傷やり。自決じけつ喪なふこととも厭いとざる。卿きやう者ものおれむ。勘八かんぱちの主ぬしを嫉にくむ。手形てがたとて。嘉二かじ郎らうに家いえ隸れいも侮あらると。恥かたじけなく。取とせむ。淺あましうり。一行いっけい状じやうあり。うくともあらず。兼七かねしちに。秋布あきふが夫とへ贈たまはる書簡あきふと錦にしんと。兼七かねしちもなく。油紙あぶらに敷かく。肩かたよりけ。その曉あけ方かたに。鎌倉かまくらを起おこして。只ただ頼たの兵へい太たと。いそぎ。日ひ數かず經へく。捨す磨ま路ぢまで來きにたり。其時そのとき兼七かねしちおもふ。う。ど路ぢをゆく事ことは。人ひとふも。勝かつ。されど。此頃このときの連風れんぷうにて。船路せんろより行いむ。只ただ一ひと脚あしも。彼かの地ちへ着きべし。あせん。おれとひとり。ごち堂どうの津つに到いたりて。肥前ひぜんの松浦まつらへ行いく。船ふねである。と問とふ。知し人ひと。答こたへ。と。翌あしたの彼かの時ときに。出でる船ふねの松浦まつらへゆくあり。々さふは。え。暮くる。と。近ちかし。え。便べん船ふねでし給たまはる。知しめて

天の明るは待給へといふ。兼七聞て大丸お喜び。やがてその船お乗りて。夕暮たうべまじす  
るに。日既暮つ。乗合の旅客等。室の遊君が夜の粧粉を見んとて。陸お上りぬ。元来財  
と積し船おろね。船人等も。甲夜の程。郷ゆきて。酒もり遊むんと。兼七ひとり。残  
おたて。船おはあらむおあり。う。兼七の只ひとり。宮漏月と暗るふ。さち渉る浪の文字なら  
で。繪島。松嶋。さんり。鞍掛の島々の。筆手歌繪お似たりけ。渾く此津の。明石の瀬。湊し。積  
く。こよな。た。眺望なれど。急ぐ旅おれば。それお心も留す。月の冷しく。牙。浦風。比。甚。疾。け。れ。ば。  
宮引被ぎて。目。睡。ぬ。さ。て。も。嘉。二。郎。が。奴。隷。勤。八。の。い。ぬ。る。日。よ。り。兼。七。が。跡。を。追。ふ。て。や。う。や。く  
和泉の。環。ふ。て。追。着。されど。その。便宜。と。得。され。ば。お。は。掃。磨。路。お。跟。求。り。この。夜。兼。七。が。船。に  
乗。る。と。見。く。大。き。な。慌。事。既。ふ。こ。こ。に。及。べ。り。今。宵。手。を。下。さ。せ。ば。彼。を。逆。に。討。も。ろ。す。べ。し。と  
て。甲。夜。に。影。の。旅。客。に。う。ち。雜。す。彼。ふ。ひ。お。乗。り。船。の。間。き。處。に。懸。居。て。息。も。せ。ず。聞。ふ。こ  
と。や。久。し。危。死。哉。兼。七。も。己。が。外。お。人。あり。とも。あ。ら。ざ。り。け。れ。ば。心。と。放。り。て。目。睡。さ。る。と。勤  
八。潛。お。張。見。く。ま。い。時。分。の。今。お。あり。と。て。や。と。ら。船。を。より。え。ひ。出。く。海。づ。ろ。の。行。囊。を。奪。ひ。と

つてこれと背負ひ。まづうらふ刀と引抜く。兼七が。呪の。あ。さ。り。を。板。子。も。徹。ま。と。ぐ。さ。と。刺。す。兼  
七。忽。地。驚。お。覺。吐。嗟。と。心。お。ど。ろ。た。お。が。ら。元。来。駭。ぬ。男。な。れ。ば。息。絶。さ。れ。お。も。ち。り。て。その  
刃。に。心。と。つ。く。れ。ば。幸。よ。し。て。免。所。外。也。刃。方。外。お。向。く。あ。れ。ば。丁。と。反。切。く。身。お。起。し。矢。庭。お  
刀。お。奪。い。ん。ど。ま。る。よ。勤。八。大。丸。お。驚。お。た。て。奪。ま。し。と。争。ひ。し。が。遂。お。敵。一。が。さ。け。れ。ば。刃。と。捨。て。  
水中へ。跳。入。ら。ん。と。ま。る。處。と。兼。七。の。刀。お。取。て。閃。く。勤。八。が。鴈。より。乳。の。下。か。け。て。切。つ  
くれ。ば。阿。呀。と。一。聲。叫。び。も。あ。へ。ず。鮮。血。さ。つ。と。潰。り。真。逆。さ。ま。お。陥。り。く。浪。の。底。よ。ど。沈。ま。け  
る。兼。七。の。既。お。敵。と。討。と。め。た。ま。じ。ど。其。身。も。大。事。の。深。痕。な。れ。ば。猛。し。眼。眩。く。船。建。の。上。に。倒。ま  
忽。然。と。して。息。絶。さ。り。去。程。よ。その。夜。も。更。闇。て。旅。客。船。人。庶。共。に。歸。り。来。つ。と。見。れ。ば。船。に。残。り  
さ。る。旅。客。が。血。お。塗。れ。て。卧。た。れ。ば。こ。い。そ。も。い。う。ふ。と。驚。お。た。さ。い。ご。さ。は。く。く。お。驚。る。ふ。氣。息。を  
こ。い。か。よ。ふ。や。う。お。れ。ば。さ。て。い。い。ま。ど。絆。切。れ。を。と。て。時。と。移。さ。せ。お。醫。師。と。招。た。よ。し。内。外。の。療  
治。手。を。竭。し。て。もの。ま。る。ふ。や。う。や。く。お。救。ふ。事。を。得。さ。り。船。人。等。この。形。勢。と。見。く。か。れ。ば。こ  
の。人。お。船。に。乗。し。く。西。國。へ。赴。ん。事。お。あ。ひ。が。さ。し。と。兼。七。と。船。長。が。家。に。お。お。れ。て。保。養

さしその夜の中は船と洗ひ浄めおどし。詰朝纏を解さりどろ。かくて兼七の、船長の家  
 ありと療治が加ふる。主人の情あるものよ。よほづ信やうは勤りしかば。第三日よ至  
 り。病おど毀るやうよありつ。かくて又十日あまりを經て。落口まこし愈よけきどいまで  
 起居の自在おらす。是主人が情ふ。絶なんとせし玉緒と繋ぎどめさま。兼七のぬうく  
 その底と歡び聞え。えどめく己が名と名告り。路銀の半と主人よ贈り。藥劑は價とし。さ  
 いふやう。彼夜さり船の中。己が行装のありはらん。うの内よ西國へとぐる書状もあ  
 り。咽喉と傷き。且くものといひがさふ。こゝろよは思ひあがら。得聞ざりし。預りお死  
 給。こゝろへ通與給ひねといふ。主人點頭。げふ彼行装の事と忘れさり。さうば進  
 るべしといひうけ。納戸より一つは袂包と引提来つ。是なるべ。よく展見く受とり給  
 へといへ。兼七見く眉根と擗め。こゝ似たれども。己が物にあらずといふ。主人も又不審  
 と。いぬる夜。船と洗るとして。乗あせし旅客の行李ども。悉く展見されど。御身が擔物  
 とればし。この外よありしといふ。兼七聞ていよ怪。その袂包とうち開けば。雨

衣一ツと。薄紙やうの物のとあり。もしその主をあるよすがともある。書物やあるとて。うち  
 返し。くるふ。紙の間よ一枚の文書あり。是すあち鼠川嘉二郎が。奴隷勤へとらしと  
 る手形。今度兼七と殺。秋布が書簡と奪ひとつ。采とらば。あうぐの賞祿を與ん。又  
 瀬川博多。自滅さ。秋布と奪ふに至らば。如此く。此賞祿せん。と書たりけき。兼七大  
 死。驚死。こゝ船の中に思ふやう。己れは傷つけさるものは。海賊ありとおもひし。さて  
 の嘉二郎が奴隷。よてありを。か、れば己がうへのみあらず。主家。此大事出来ぬと。心頼り  
 に安からねど。さもな死おも、ちして。彼手形と巻へし。主人を見くへりていふやう。この  
 袂包も己が物ならねど。はろく。敵故と考るに。わが行装の彼夜さり。盗賊が奪ひとつ。  
 支黨。通與さる。さもなくば。うのものがみづから春負たらんと。われあらむして水中へ  
 秋。こもし程。彼包も諸とも。底の水層とやかりけん。今い流ふ日と經されば。舊の水底。小  
 ありあべうらす。包れうちぬる。わが物もあらず。人より預くも。くをなれば。失ひて  
 の面。死所爲へといふ。主人。かろく。とうち笑ひ。あうらば。その袂包の。盗賊が船にお

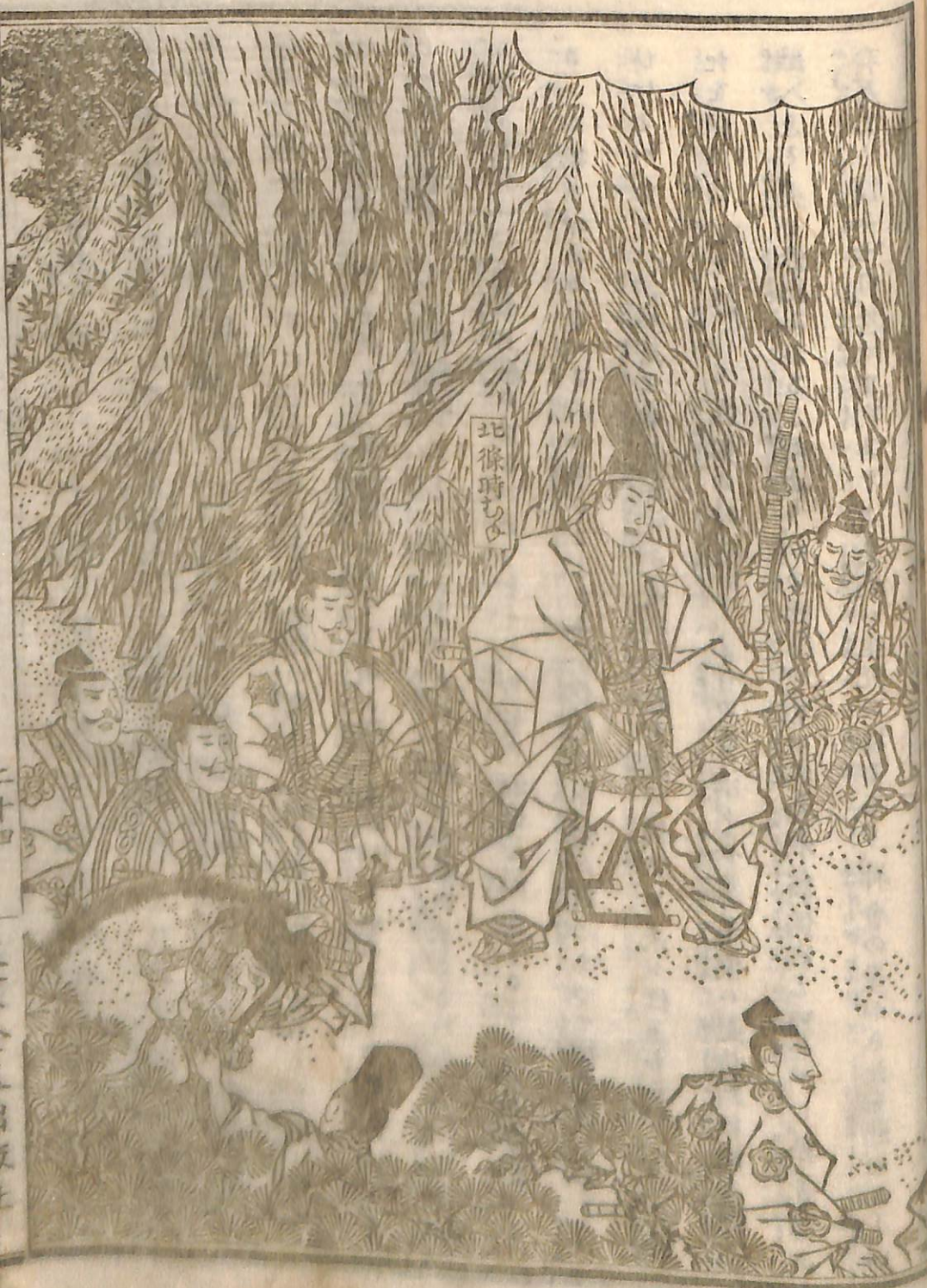
きたるものふこそ。御身今度の厄難ふく人の物と捨給へども命と拾ひ給ひしう。これふ  
ます僥倖いふ。立歸りて縁由と告給ひ。その主もいうでう恨給ふべき。といひ慰めて  
やがて外面へ出ふたり。こゝふ子と策七口。又一層の劬勞とまゝして。ぬゝ、び思ひぬぐら  
ふ。これ今錦と書簡状失ひて。往ても還りてもいひ諱か。あうかれど。今をからむも。嘉二  
郎が手形と得る主君の大事とあるうへ。一日も躊躇ふがごとく。金磨全く愈むとも。ほづ錦  
倉へ立歸りて。主君へこの手形と見せまゐらせん。又西國へ赴た。婿君へ告申さんと  
て。とさほかうさま思ひ煩ふ程。痰口ぬゝ、び壊。告痛えどめに彌ましければ。又いとづ  
らに日と過ぬ。

第八

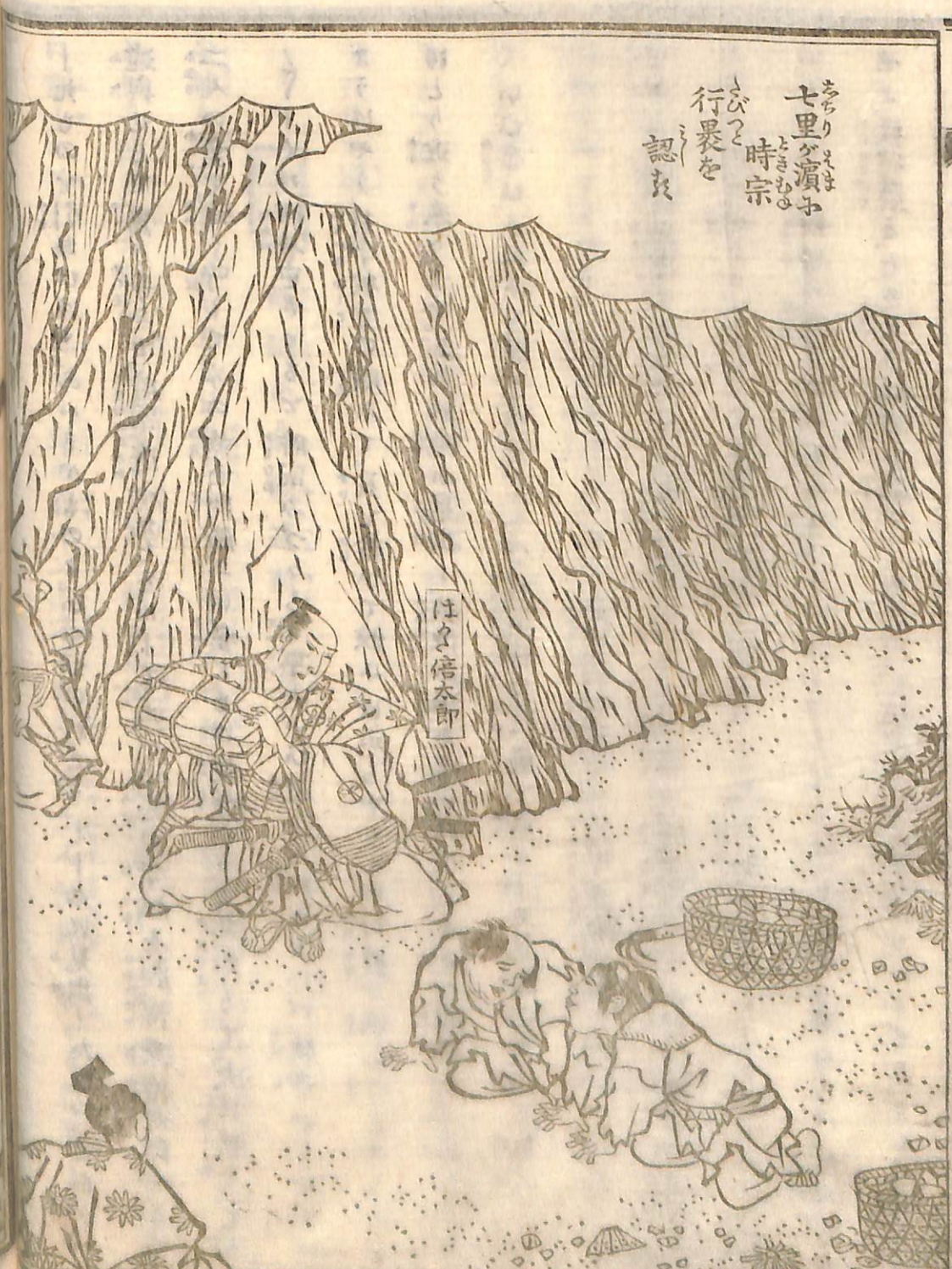
錦繡の和歌邊將と召

今茲も既小暮て。あらたまれ春立かへり。鎌倉ふは。執權時宗朝臣。太宰の經高誅伐の祈願  
として。博多倍太郎以下の近臣と召俱。榎嶋辨財天へ參詣あつ。七里が濱と歸り來給ふ  
に。海士の子どもうと見え。羊の程十二三才な若男の童二人。油紙小裏さる。行裏とれば

一犯ものと引あひは。あゝ己がものよ。いふおのれころ。むづめに見出しなれば。こふさへ  
通與せとて。罵り争ふ。時宗遣小見をなして。まゝ馬の手綱を扣。博多倍太郎ともて。  
二人の童と近く呼いて。うの故を問給ふに。童どもは。執權ふりと見奉りて。大に畏り。そ  
うぐいぐい回答申さると。時宗みづうら町等ふいひ論して。問たまへ。彼等やうやくに  
まうはやう。目今彼首の磯ふて。貝と拾ひて候。はからすもこの行裏が浪小打よせられ。  
ほとり近う来り。おのれ先小見出し。彼後小取あげされ。こまへ通與せ。通與さすと  
て。いひ争ひとたふて候。と申せしう。時宗件の行裏と召よ。て見給ふ。細き麻糸もて。  
縦横ふかざりたるが。小衣木札をつけて。肥前國矢田津の陣中。東軍の軍監。瀬川米女。ぬいへ  
寄奉る。拙婦秋布とありけま。時宗やがて。この行裏と。博多倍太郎小預さまひて。童に置  
ふやう。途に遣さるものなりとも。私小拾ふ事う。それと私小拾ひ。己が物とする。罪  
いとふり。彼等の童なれば。わたまへすもあるべ。この後もかゝる事あら。村長小中  
せよ。彼行裏も。その主の姓名と記し。あれ。あふさより返し。はらうしてん。なふの許すに



北條時宗



はな倍太郎

七里ヶ濱中  
時宗  
行果を  
認め

とく行ねと仰まれば、童どもいよいよ畏る鼠の避るがごとく、走り去りぬかくて時宗朝臣に、錦小歸りたまふと。やがて博多倍太郎、行装を解ひらかして、見給ふに内に秋布が夫へ贈る書簡一封と、錦一卷ありなり、潮垂るとど。まづりに乾きして、まづろの書簡は讀し給ふ。文章は雅たるいふもさらあり、離別の悲みと述て、山難影速くして、鏡と分の恨を記し、獨居の懶を舒て、蝙蝠舞ふうして、扇は題せるの例をいへり、その辭悽惋とてものがあしく、うの情親切よして艶ならず、これを聽もの落涙せざるいふ。時宗又かの錦を見給ふに、尋常は織さほよにあらむして、百首の和歌と織あしするが、その斐の巧なる、その歌は妙なる。まべく人の及ざるとこ洩されば、時宗頻ふ感心あつて、博多倍太郎は宣ひけるに、むう異域唐の會昌年中、邊將張極が妻の侯氏に、夫が任みあることの久しきを歎れ、回文を誇して、龜形の詩を作し、又晉の竇滔が妻惠若蘭に、文旋圖の詩を錦に織入し、夫が秦州にあり、贈書り、今の秋布に、己が邦の若蘭侯氏といふべし、渠吉次も齊眉こと、僅ふ七日、忽地、別きより、夫に生死の場あり、再會の量がと死を悲むことい

と不便に、えやう吉次を召へて、秋布がころろを安んじ得させんよ、と宣へば、倍太郎答まうに、仁君上は在を、彼等が身よしく、莫大の思恵不思議の僥倖なり、あうれどもこの事よよつ、吉次を召選さんと仰ふに、秋布が父彌四郎に、思愛に溺れ、忠義と鉄もぬあらねば、世の職をなもひ、婿の思にんとこ洩と差く、固解まうにべた歎、又秋布も貞操ある女子なれた、却心うく思ひ候べし、よや彼親子のえの、固解申さずとも、吉次もその妻の戀慕よよつ、召かへさるゝとあり、暇がら、いうて、阿容くと立歸り候べた歸ると、丸に世の胡慮となり、歸らざれば、君の命よ違はん事と恐れ、忽地、討死いとまべうもあらん、世言よ、心あつ、花を栽れば、花活す、意あく、柳と挿べ、よく蔭といふことあり、得と賢慮をめぐら、給へら、と憚る氣色もあくまうせ、うに、時宗朝臣かさねる宣ふやう、秋布が申すところ、甚理り、稱へり、あうにあれ、東軍數千騎の中より、吉次只一人を召へすに、丸牛が一毛取り、一將に得がとしといへども、實政の軍配よ千と、おぼつらなれ所あり、且秋布に、己が母の愛と死ものおぼを、あうる、彼女子、哀慕、堪ずして、世と去ること



もあらば。さこそ不便におぼせしめ。時宗が母と思ひ奉るも。秋布が夫と思ふえ。恩愛あへて異なることなし。懃ふ明白よいひあらしめてこそ。彌四郎秋布も因辭まうし。吉次も歸るべからむ。妻も舅もあらしせずして。猛に吉次と召うへさんよ。彼又何の故ともあらず。違背せんやうのあらど。この使を委んものい。汝あらずで外おかし。急ぎ彼地へ赴た。吉次は將と參れうしと仰するま。倍太郎不覺に感涙と押う。貞婦忠臣の下お出るも。賢君上は在まが故あり。寔にお彼等も。よき月日の下お生れ。かくお不けなき仁愛と蒙り奉るよ。とまうして。異議なく領掌あさりしう。時宗やが。件の錦を直垂に縫いて。秋布が書簡と共に倍太郎に授。汝彼地へ至らば。この直垂と吉次と與へ。己が命と傳へ。又書簡の假初も来て来りしおもちして。どまけ得させよまうら。吉次聊も疑を。汝ととも歸り来つべきなり。と宣へば。倍太郎承。件の二品と受とり奉。俄頃に行装と整。従者のいとやつし。次の日鎌倉と起行し。馬の頭と西に向。夜を日。繼で馳りたる。この事世に披露ありしう。瀬川博多が家へ告るものもあらず。秋布の春もありても。兼七が歸り来

ざれば。いよこころもどなく思ひ。寢食と安うせず。病がちよて日をおくれ。俊平もこの故に心と痛め。父の彌四郎の。女兒が爲。鶴岡の八幡宮へ參詣して。鷲の羽に征矢二條。願書と添く奉納し。賊徒速に謀伏ま。吉次は恙なく。凱陣あらせ給へど。祈りぬ。げも。武夫の。やとけ心も子に引き。心よいくもありぬべし。されば神に誠ある人。守給へども。宿因の禍に救ひ給ふ。由あきま。この願書より事起。て彌四郎が身と喪ふとい。後ふぞ思ひあはされ。を。



松浦佐用媛石魂録前編中終

